

# 夕陽會報



第190号



函館市中央図書館



◇巻頭言◇

## 夕陽会創立九十周年を迎えるに当たって

副会長 山 柿 三 夫  
(昭和29年卒)

平成十八年度総会において、夕陽会創立九十周年事業が承認され、平成二十年六月二十一日(土)に開催されることが決定された。それに伴いこの十一月十六日、本部役員会は、第一回事業実行委員会の発足させ、規約や委員の委嘱、事業の概要や予算等を検討し、平成十八・十九年度の二年間にわたる開催準備を、正式に歩み始めることになった。

思えば、平成十年八月八日に、八十周年記念を盛大に祝賀してからこの十年間は、母校函館校と夕陽会にとり、大学の法人化とキャンパス再編の波に洗われ、かつてない程の大転換を迫られた日月であった。その結果函館校は、開学以来続いた教員養成課程の募集を停止し、この四月から新課程「人間地域科学課程」の学生募集が行われ、新一年生が入学し現在勉学に勤しんでいるところである。

これは今日までの夕陽会終焉の始まりであり、新しい夕陽会の誕生を意味するものである。

会報一八九号で川島会長はこのことに論及し、「このように母校が大きく変革した現在、当然夕陽会の運営やその組織の在り方もそれに対応し変わっていかねばならないことは必然的なことであります。既にゼ口免課程が誕生して二十年近い歳月が流れ、教職以外の分野で活躍している同窓も数多くおられます。近い将来教職以外の同窓が中心となる夕陽会の時代の到来のための準備を急がねばなりません」と述べ、更に「そのためには、教職

以外の社会で活躍する同窓と、これから巣立つ学生諸君に魅力ある同窓会として受け入れられるための、新しい夕陽会づくりの議論を深めていく必要があります」と結んでいる。少し長い引用だがこの会長提言は、今後われわれがしかと体していかねばならぬ至言と考えるからである。「新しい夕陽会づくりの議論を深める」のは、だれがいつから始めるのか。それは、この十年間変革の波に揉まれ、やむなく本道教育界から去るという結論を引き受けざるを得なかった我々が新しい後輩のために、その任を負うべきであり、その開始はこれから迎える夕陽会創立九十周年を画して着手し、しっかりと組織で、構想を練るのが必要であろう。これは九十周年記念を迎えるに当たっての愚考である。

私が青年教師の時代に読んで感銘し、その後いろいろな場面ですら当たるとき嘯みしめた言葉がある。「どんなことがあってもめげずに忍耐強く執念深く、みだりに悲観もせず楽観もせず生き通して行く精神。それが散文精神であります。じつと我慢して冷静に、見なければならぬものは決して見逃さずに、そして見なければならぬものに怯えたり、目を蔽ったりしないで、何処までもそれを見つめながら生きて行く」という精神であります」(広津和郎、散文精神について、昭和十四年)この精神で戦中戦後一貫した作家は、容疑者達の澄んだ眼の輝きを見て、松川事件に取組み解決したのだ。

# 全国支部幹事長会議

「創造し、行動する夕陽会」のさらなる発展のために

## 【道内支部幹事長会議】

今年度の道内支部幹事長会議は、札幌市において八月十八日（土）午後三時三十分よりホテル「サンプラザ」を会場に、本部役員八名、道内二十一支部の幹事長の出席で開催した。

冒頭、川島会長が挨拶の中で、「日頃の夕陽会支部活動を支えてくれている各支部幹事長の皆さんに深く感謝申し上げる。本日は各支部の取り組みを交流し、夕陽会の活性化につなげたい」と話された。



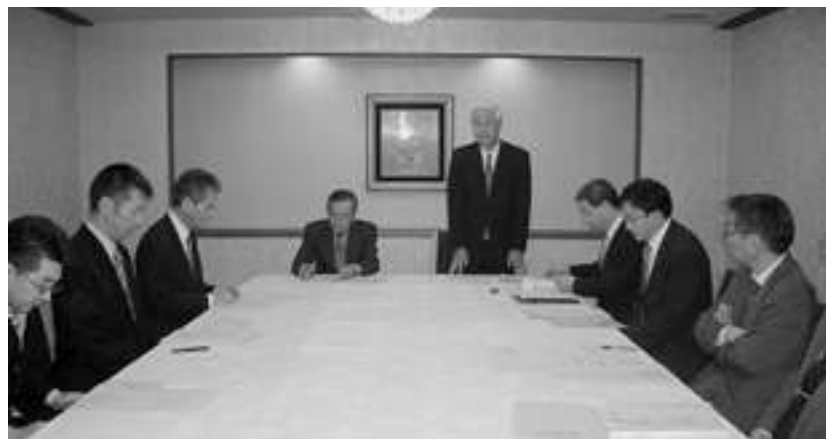
岡中瀬裕義副会長の議事進行で報告・協議が行われ、母校の状況並びに平成十八年度本部事業の概要報告では、今年度の運営方針・推進事項の重点である組織強化や夕陽会創立九十周年記念事業の準備について検討していくことが述べられた。

母校関係については、会長から「いよいよこの四月から母校は人間地域科学課程という新しい道でスタートしたが、予想以上の志願者数があったと聞き安堵している。これまでと同様に母校支援へのいろいろな手立てをこれからも講じながら、同窓会加入の呼びかけを強めていきたい」とのお話があり、大学の先生の大らかな異動や函館の文化活動衰退の心配、教員採用への支援、教員以外の同窓生の掌握等について話された。続いて、各支部の活動状況の報告があり、「高齢化社会が進む中OB会員をどう位置づけ、活躍していただくか」「少子化時代、身の丈にあった運営を」「教員たるものの在り方として」「子ども・教育を愛する夕陽会」「ためになる夕陽会」「困ったときの夕陽会」となるよう同窓意識を高め母校の発展を」などが話し合われた。

最後に、会長より「忘恩の徒となることなかれ」と挨拶があり、この会を終えた。

## 【本州支部幹事長会議】

今年度の本州支部幹事長会議は、東北ブロックと関東ブロックに分かれて実施した。



東北ブロック支部幹事長会議は十二月二日（土）、青森市において開催した。都合により、青森南部・秋田・岩手・宮城支部は欠席となったが、青森津軽、青森西北五支部幹事長の出席で開催した。

川島会長の「母校は新課程となり寂しい思いはあるが、大学が淘汰される時代、函館校存続の道としての選択はあながち間違いない」と考え母校を応援したい。今年度も母校を志願する東北地区の学生が多く、しかも、教員を望んで入学した学生が多いことを嬉しく思っている。教員以外の同窓会員登録数の増がこれからの課題、入会の呼びかけの協力をよろしく願いたい」の挨拶で会は始まった。

中谷匡利副会長の進行で議事が進められ、まず、会長・幹事長より母校の状況並びに今年度本部事業の概要の報告があった。次に、土谷副幹事長が夕陽会創立九十周年記念行事・事業の概要を報告し、各支部の活動状況の協議を行った。

中谷副会長の「各支部の活動が基本、集まりやすい環境の整備が大切」のまとめにうなずきながらの閉会となった。

その後、支部長や近隣の会員が加わり合同懇親会が行われた。教え子高見盛（大相撲）・泉浩（柔道）両氏のエピソードや学生会館・母校グラウンドを二つに分けた道路のことなど楽しく懐かしい話題に包まれ、外の吹雪を感じることもなく静かに夜が更けていった。

関東ブロック支部幹事長会議は十二月九日（土）、東京で開催した。残念ながら、都合で千葉・埼玉両支部からの出席はなかったが、東京支部の奈良支部長・高橋副支部長・相川幹事長・石田副幹事長が出席した。本部長、幹事長から母校の様子や本部の活動状況、事務局各部の業務などについて説明した。その後、東京支部の現状や課題について説明があり、特に、関東各支部の会員拡大や支部相互の連携について意見交換した。今後、東京支部を中心に関東三支部はもとより神奈川なども含め、活性化を図っていくことを確認した。

会議の後、恒例の東京支部年末懇親会には、東京在住の五人の大先輩が参加され、函館での思い出話や現職会員との交流に花が咲いた。夕陽会創立九十周年には「東京からツアーで参加！」の心強い発言も飛び出し、和やかな一夜であった。



## 会務報告



幹事長

須藤 由司  
(昭和52年卒)

## 《一般会務》

6・1 平成十七年度第六回本部役員会、顧問・参与会を開催する。

8 函館校の現状について杉浦副学長・高田事務長と川島会長・須藤幹事長が懇談する。(函館) 13 (〃18) 第八回夕陽美術展を芸術

ホールで開催する。(函館) 17 全国支部長会議・平成十八年度本部総会・大懇親会を開催する。

19 渡島教育局・函館市教育委員会・函館校を川島会長・須藤幹事長が表敬訪問する。(函館)

23 檜山教育局長等幹部を川島会長・中川副会長・須藤幹事長が表敬訪問する。(江差)

30 北海道教育大学再編式典に川島会長が出席する。(札幌)

7・3 教員採用試験対策講座に支援・協力する。(函館)

15 北海道教育大学五校同窓会会長・幹事長等会議に川島会長・須藤幹事長が出席する。(岩見沢)

## 受賞(章)おめでとーございませう

## \*瑞宝双光章

黒丸宗太郎 氏 昭和14年卒  
函館市乃木町四の三〇追分 隆 氏 昭和20年卒  
北広島市稲穂町西六の三の一七田中 則夫 氏 昭和28年卒  
北斗市東浜一二の三〇武内満智夫 氏 昭和30年卒  
岩内町栄八の六小本 毅 氏 昭和32年卒  
江別市大麻中町二六の一八大麻コーポ五二六

## \*北海道教育功績者表彰

沼崎 孝男 氏 昭和44年卒  
函館市宮前町八の六絹野 秀克 氏 昭和45年卒  
岩内町宮園二三九の二

## \*日展入選(書部門・篆刻)

下山 訓 氏 平成4年卒  
八雲町出雲町四〇の一三

## \*函館市文化団体協議会 白鳳章

中村 薫 氏 昭和30年卒  
函館市西桔梗町七三三の四六河合 浩一 氏 昭和32年卒  
森町森川町二一六の二

## \*函館市文化団体協議会 青麟章

大川富美男 氏 昭和45年卒  
七飯町字本町四八一の一三

## お詫び

前号の「受賞(章)おめでとーございませう」欄で小本毅様の住所を誤って掲載しておりました。深くお詫び申し上げますとともに、訂正させていただきます。

29 18 夕陽会報第189号を発行する。(〃30)明日の教育を考える研修会(過年度卒業生対象)を開催する。(函館)

8・4 北海道教育委員会教育長等幹部を川島会長・須藤幹事長が表敬訪問する。(札幌)

9・9 道北ブロック会議に川島会長・須藤幹事長が出席する。(旭川)

19 道内支部幹事長会議を開催する。(札幌)

25 (〃31) 教員採用試験対策講座(二次)に支援・協力する。(函館)

29 会 新長万部町教育委員会教育長を川島会長が表敬訪問する。(長万部町)

9・2 鶴陵会渡島支部懇親会に酒井副会長が出席する。(函館)

25 渡島教育局長・次長と川島会長・須藤幹事長が懇談する。(函館)

10・7 夕陽中央会議を開催する。(札幌)

12 北海道教育功績者表彰受賞者に祝意を表す。

13 第一回本部役員会を開催する。(函館)

14 金子鴻亭生誕百年記念展祝賀会に川島会長が出席する。(函館)

29 日本教育会函館大会に須藤幹事長が出席する。(函館)

11・11 北師函館・渡島支部懇親会に川島会長が出席する。(函館)

16 本部事務局会議を開催する。(函館)

16 夕陽会創立九十周年記念実行委員会を開催する。(函館)

25 道央ブロック会議に川島会長が出席する。(帯広)

9 渡島支部長万部支会総会に尾島副会長が出席する。(長万部)

15 青野昌勝(昭37卒) 個展・八人展に祝意を表す。(函館)

23 中村朝山(昭30卒) 書道展に祝意を表す。(函館)

7・4 渡島支部森支会総会に川島会長が出席する。(森)

10 渡島支部松前支会総会に花田副幹事長が出席する。(松前)

21 渡島支部福島支会総会に山柿副会長が出席する。(福島)

22 渡島支部木古内支会総会に須藤幹事長が出席する。(木古内)

23 特別別科同窓会三十周年記念祝賀会に祝意を表す。(函館)

8 夕陽指導主事等会設立三十周年記念祝賀会に川島会長・中瀬副会長・須藤幹事長が出席する。(札幌)

31 昭和39年卒同期会に祝意を表す。(函館)

10 昭和39年卒同期会に祝意を表す。(函館)

9・10 清水ふみひと(平2卒) モダンダンス公演会に祝意を表す。(函館)

26 昭和38年卒同期会「淑女の会」に祝意を表す。(函館)

27 北二師同期会函館大会に祝意を表す。(函館)

29 学大30会同期会に祝意を表す。(函館)

13 二九の会同期会に川島会長が出席する。(函館)

28 昭和35年卒同期会に祝意を表す。(函館)

《支部総会・祝賀会・個展等》  
6・9 渡島支部知内支会総会に川島会長が出席する。(知内)



## 「第八回夕陽美術展」を終えて

事務局長 横岸澤 英 二  
(昭和51年卒 函館市立本通中学校)

本会のモットーである「創造し行動する夕陽会」の文化活動の一環として、「第八回夕陽美術展」が函館市芸術ホールギャラリーを会場とし、六月十三日から十八日まで開催されました。今回の美術展は、会期を夕陽会総会に合わせたこともあり、前回の来場者を上回り盛会裡に終了することができました。

出品作品数は、絵画五十点、彫刻八点、工芸五点、デザイン三点、計六十六点でそれぞれの分野で活躍されています。母校教官の小平征雄先生、相田幸男先生、石井宏一先生を始め、昭和十九年卒小山内重名先生（函館市在住）を筆頭に、昭和の各年代の諸先輩、現役の先生、平成年代の方々の作品。遠くは別海町の大井誠一郎先生（四十九年卒）。更に今回から、大学院生のみならずにも出品していただき、若い感性が光るバラエティー豊かな美術展となりました。

会期中は、道内各地から卒業生の方々が来観くださり、懐かしい再会、作品を通しての会話が盛り上がる場面も見られ、制作への刺激を受けていました。

一九七八年から四年ごとに開催している美術展ですが、実行委員長の藤川潔先生を中心に、一年前から会場確保や出品依頼等準備を進めてま

2006年（平成18年）6月14日（水曜日）函館新聞



オープニングセレモニーでテープカットをする川島会長（左から2人目）

いりました。作品搬入・搬出から展示に至るまで、実行委員の皆さんに支えられました。今後多くの皆様の出品を期待しております。

最後になりましたが、美術展開催に当たり、お力添えをいただきました川島孝夫会長をはじめ、先輩各先生、夕陽会員皆様のご厚情・ご支援に心より御礼申し上げます。

## 夕陽会創立九十周年 記念行事・事業の準備状況

本年度の本部総会において創立九十周年記念行事・事業の実施について承認されたことを受け、本部役員会を経て、十一月十六日に実行委員会の設立総会が開かれました。

総会では、創立九十周年記念行事・事業実行委員会規約、記念行事及び事業内容、事業予算、実行委員等について審議され、承認されました。

実行委員会には次の各組織を設け、各種行事・事業の推進に当たります。

- 式典部 記念式典に関する業務
- 祝賀会部 記念祝賀会に関する業務
- 記念事業部 記念事業に関する業務
- 記念誌発行部 記念誌発行に関する業務
- 総務部 庶務、会計に関する事務処理

予定している記念行事・事業案は次のとおりです。

### 1) 記念行事

平成二十年六月二十一日（土）

- ① 九十周年記念式典の挙行
- ② 九十周年記念祝賀・懇親会の開催
- 2) 記念事業

- ① 九十周年記念誌の発行
- ② 九十周年記念夕陽音楽祭の開催
- ③ 夕陽記念館の改修及びリニューアルオープニングセレモニーの挙行
- ④ 九十周年記念会員名簿の発行・会員拡大キャンペーン

詳しい内容については、現在、実行委員会検討中であり、次年度の本部総会及び会報等で皆様にお知らせをしたいと思いますと考えております。

## 第八回夕陽書道展に向けて

文化部長 玉手 道男

昭和五十三年に第一回夕陽書道展を開催してから、第八回を迎えることになりました。全国各地で書活動をしている会員はもとより新たに書を始めた方々にも出品していただき、書をもって文化的な繋がりを求めつつ心の交流を深め合っていきたいと願っています。

### 《第八回夕陽書道展》

○期日 平成十九年七月十一日（水）

〃七月十六日（月）

○会場 函館市芸術ホールギャラリー  
問い合わせ先 夕陽書道展実行委員長

大川富美男（瀨湖）  
（昭45卒 桐花中学校長）  
電話〇一三八（四一）一三三二

## 平成19年度 本部総会・懇親会

◆期 日 平成19年6月16日（土）

◆会 場 函館国際ホテル  
(函館市大手町16-9 ☎0138-23-6161)

- ・支部長会議 午後1時30分～
- ・総 会 午後4時～
- ・懇 親 会 午後5時30分～



## 函教大卓球部OB会

会新長 三島 俊博

(昭和47年卒 函館市立潮見中学校長)

### 卓球同好会から卓球部に

私が函教大に入學した昭和四十三年四月のことである。当時、卓球に夢中であった私は、卓球部がどこで活動しているのかワクワクしながら学内を探し回った。ようやく見つけたその場所は、飯講堂に併設された狭いスペースのミニ体育館であった。そこに、剣道部と卓球部が同居し、背中合わせで練習していたのだ。通路の片側には、冬になると雪が隙間からはいり更衣室があり、背に竹刀の恐怖を感じながら練習した記憶がある。部員は数名で、当時四年目の小嶋創氏(神奈川県勤務)がキャプテンを務め、まだ部として認められない同好会として活動していた。

予算が付かず、すべて自前で活動するのは大変なことで、私は入部してすぐに、部に昇格させるために部員を集め、練習を充実させることに力を入れた。

三年目に入り、部員は二十名を超え、練習にも熱が入ってきて、ようやく部として認められたのである。その後、部に昇格した二年目半ばかり飯講堂を貸していたが、ようやく広い場所で練習ができるようになった。

### 全道大会三部脱出

しかし、全道大会では依然として三部(最低のブロック)をさまよい、まずは二部に昇格させることが大きな目標であった。そのために、空き時間も利用し

て練習した。時には体が疲れているため、飯講堂に設置されている長いすで仮眠をし、練習相手が来るのを待っていた。練習は、空き時間と放課後に行い、二部昇格を目指し、一丸となつて頑張った。

ところが、学校数も多く、三部脱出はそう簡単には成し得るものではない。ようやく達成できたのは、私が卒業する年の秋季大会であった。

その後、後輩が更に猛特訓を重ね、それから更に四年後、ついに一部昇格を果たしたのである。

### OB会発足

当時、部を創った小嶋氏や我々の思いは、その後も函教大卓球部に受け継がれ、現役とOBとの付き合いは途絶えることはなかった。

そんな中、昭和五十三年卒の東海林清氏(尾札部中)がOB会設立を提案した。OB・OGの交流を深めることと、現役をバックアップするためである。現在、会員は約百五十名で、年一回母校の体育館で交流試合を行っている。OB・OGと現役の対戦、そして全員が混じつてのダブルス戦など、手加減せず本気で戦うから面白い。

その日、夕方からは総会・懇親会を開き、毎年「卓球便」も発行している。この中には、現役の一年間の戦績、出席できなかった人のために会員の近況報告、交流試合や懇親会の様子を知らせる写真、



全員の名簿などを掲載している。この「卓球便」を楽しみにしている会員の声を聞くと、思わず笑みがこぼれ、疲れも吹き飛ぶ。

### 二度目の全国大会開催

今年八月、坂上範夫氏(昭和48卒・旭岡中長)が競技委員長を務め、全国教育(学芸)大学卓球選手権大会を三日間にわたり、函館市民体育館で開催した。この大会はOB・OGも出場できる大会で、大会運営と、選手としての出場を、OB会の総力を挙げ、現役と協力して成功させることが出来た。この全国大会を通して、以前にも増してOB会の結束力がついたことは確かだ。この様子は「卓球便」で会員一人一人に伝えていくことにしている。今大会を成功裡に終えることが出来たのは、OB会会員の協力のみならず、夕陽会や母校である函館校から、多大な援助をしていた、たいお陰であると会員一同感謝している。

大会終了後の打ち上げでは、互いに酒



を酌み交わしながら、「函教大卓球部OB会」の絆を深め、大会運営を終えた満足感に酔いしれた。

### 先輩に感謝

振り返ってみれば、同好会であった時代から先輩というものはありがたいもので、部費がないつらさを十分知っていて、初代主将の小嶋氏などは、初任給(当時は六万円にも満たなかったはず)の中から何千円かを、何度となく送金して下さった。そのお金でボールを買い練習した思い出がある。私自身「先輩を思いやる心」を、その時先輩から学んだ。そのようなこともあり、OB会は、現役を全面的に応援する立場で、これからも運営していく。

函館校を母校とし、共に汗を流した仲間が今できることは、母校のため、先輩のため、万分の一かの恩返しをすることではないだろうか。





夕陽會創立80周年記念制定歌「夕陽讃歌」の披露演奏



# 夕陽會九十周年に向けて 源遠流長

顧問 安島 進  
(昭和24年卒)

「夕陽會」真つ赤に燃える夕陽に情熱を覚え、空を染める茜色は人々に安らぎをもたらす。この永遠の営みをわが心として明日に向かって力強く歩み、発展を期する互いの絆を象徴している。夕陽八十年「土地墾闢人民蕃殖」の精神を新世紀に引継ぎ鮮やかに開花することを誓う。

一九九八年八月八日午後、五稜郭の芸術ホールで開催の夕陽フェスティバルの第二幕、混声合唱団による記念制定歌「夕陽讃歌」の披露。続いて、夕陽會創立八十周年記念式典、その第二部「夕陽八十年を讃える」で繰り広げられた、三十数駒にわたる貴重な歴史映像をしめくくる最後のナレーションである。

一連の式典セレモニーは会員に等しく感動を呼び、余韻とともに第三幕の祝賀会場に向かうバスの人となった。

国際ホテルでの祝賀会は千余の参加者となり、開会セレモニーの後、二つの大広間に分かれての懇親会となった。考えた末、「比較的年配の上級生」、「比較的若い下級生」などといって部屋割りに理解と協力を戴いた。何故か若い方には好評で、賑わいもなかなかのものであった。「比較的若い下級生」の会場へ記念祝賀会部のスタッフ一同で挨拶に出向いた際、私は謝辞の最後に「次は百周年記念になるであろう。その準備は君達の番だ。九



第一号卒業証書（古谷 全氏）

十周年もあるね。私は、その頃は天上から乾杯だね。よろしくたのむ。」と述べた。正直言つて「百周年記念」は大きな節目として意義深いものがある。九十周年記念は卒寿ともいってそれなりに意義はあるが、百周年に向けての基礎固めの意義を合わせ持つものであることが望ましいと思っている。そんな気持ちの表れが先の挨拶になった。

それから八年、九十周年はあと二年後になった。本部事務局は既に九十周年記念事業の準備会議を重ねている。百周年を視野に入れた基礎固めも意図しているとのことで、夕陽記念館の整備もその予定にしたいと聞いている。

大正期の学校建築の風格を残す文化庁指定有形登録文化財である。開校時から歴史を持ち九十年余の風雪に耐えての今日である。この間、幾度か修復を試みているが、なお土台、外壁、窓周りなどの修理を必要としている。その予算は大学との相談事項だろうが、同窓会として

も相応の支出が必要であろう。百周年を視野に入れた九十周年記念事業として、計画化することも一案であろう。

先日、夕陽會のホームページを開いて見た。夕陽記念館内がくまなく紹介されていて、厚生部とWeb委員会の大変な努力に敬服した次第である。

テーマ別に四室に分類されているが、中でも興味を引いたのは、第二室「師範教育」を通覧してのことである。

大正七年三月卒業、即ち函館師範学校第一回生の額入りの卒業証書である。しかも証書番号が第一号である。古谷 全（たもつ）氏のものであり、和田喜八郎初代校長名によるもので、卒業生通算一万九千余名の一番最初の授与者なのである。「ふ」で始まる名なのに第一号が授与されていることに想像を逞しくしてみた。氏は附属小学校訓導、文検取得後は母校の教官にもなっている。卒業後間もなく函館師範学校同窓会創立委員となり、会則の作成にも携わっているなど、同窓会創立の功労者でもある。氏の卒業証書の意義深さは、本会にとって正に国宝級と云えよう。

他にも草創期からの母校の歴史と共に歩んできた先輩の足跡をたどり「旧きを尋ね新しきを知る」ことができる豊富な資料が展示されていて、誠に貴重である。母校は今年四月から人間地域科学課程の教養系キャンパスとして、幅広い知識と専門性を身につけた人材の育成にあたる事になった。大きな様変わりである。

この際、源遠流長、母校のそして夕陽會の源流が末長く後輩に引き継がれることを願つて、記念館の整備に期待を持つものである。

# 支部の歴史をふりかえって



## 「石狩教育」の一翼を担う夕陽会をめざし

### 夕陽会石狩支部の中興と発展への歩み

石狩支部長 西 家 健 悦

(昭和45年卒 千歳市立信濃小学校長)

「♪拓北の熱き想いに集い来し 若もの達よ…♪」の夕陽賛歌で石狩支部の総会が始まる。引き続き懇親会が行われ、「♪巴湾の水の精を掬み 亀田の森の霊を探り…♪」の寮歌を声高らかに歌い上げ、年一回の総会・懇親会が閉じられる。毎年、桜前線が石狩の地に到達する五月上旬に開催され、今や夕陽会石狩支部の最大の集いとして定着している。

しかし、ここに至るまでには先輩達の並々ならぬ苦労があったことに思いを馳せなければならない。ところが残念なことに、現職の会員で支部の来し方を明確に知っているものはいない。そんなおりに、本部より本稿の依頼である。役員一同頭を悩ました結果、困ったときには大先輩にお聞きしようという結論に達し、石狩支部を今のような体制にするのに尽力された元支部長で現支部相談役の河村敏明氏(昭27卒)に当時の様子をお伺いすることにした。その内容を交えながら石狩支部の来し方を振り返ってみたい。

#### 石狩支部の中興期

昭和四十四年河村氏が檜山管内から石狩管内に転入したときは、夕陽会石狩支部は存在していたと思うが、少なくとも現在のように、転入者や新卒者に声をかけたりする組織的な動きはなかったよう

だ。昭和四十九年河村氏が教頭昇任後、当時幹事長であった石井久氏(昭23卒)が後志管内に転出することになり、河村氏が同窓会事務の引継ぎを受けた。当時の支部長は石井四郎氏で、「私は教職経験者でもなく、夕陽会の運営をよろしくお願いします」とのことだった。

そこで、とりあえず、引き継いだ名簿をもとに、昭和四十九年の夏、臨時の会合を呼びかけた。参集したのは七、八名位であった。その中に、寺下幸雄(昭30卒)、遠藤晃彦(昭30卒)、武田巖(昭30卒)、巖信栄(昭31卒)の各氏がおり、とにかく組織化に取り組みようと決意し話し合った。

正式に再編というかたちで組織化がなされたのが、昭和五十年代に入ってからである。その当時の役員は、支部長土屋文男(昭13卒)、副支部長伊藤崇(昭13卒)、竹内滋(昭13卒)、幹事長河村敏明(昭27卒)の各氏であった。

そのころから年に一回の総会を定期的に開催するようになった。総会では夕陽会本部会長や石狩教育局関係者を来賓として迎えるようになり、夕陽会石狩支部としての組織がしっかりと形づくられてきた。

五十年代の活動の重点は次のようなものであった。

①同窓の結集強化を図り、運営の組織化を進めること。

②教頭職層を充実させること。

なお、そのころから重点にもおさえられているように、管理職を増やすことを課題としておさえ、校長採用や教頭昇任に向けた研修を行うようになり、現在の研修活動の土台が築かれた。

また、支部の中興に当たり、石狩教育局に勤務された同窓の指導主事の先生に大きなご支援を頂いたことや、夕陽会本部の会長、幹事長が御多忙な中、総会に参列され激励を下されたことも大きな励みとなっていた。

#### 石狩支部の充実期

昭和五十年代に中興された石狩支部であるが、その後もさらに充実した活動ができるようにということで、当時の先輩や役員の皆さんが基盤づくりに尽力された。そのころの活動の様子が夕陽会報(昭60・12・28号)に掲載されているので転記してみる。執筆者は当時の武田巖幹事長(昭30卒)である。

「石狩支部は小中高に勤務する会員がようやく百の太いパイプに乗り、約百二十名となった。校長四名、教頭六名で支部の活動の中核として活躍している。

五月二十五日、本部瀬川会長を招いて定期総会を開催し、組織強化と人材開発を重点施策とした活動方針を確認し、新年度の役員選出を行った。引き続き、教育関係者と新入会員の歓迎会に移り、懇親を深めた。中略、野畑義男支部長(昭22卒)の積極的な行動力によって、行政との太いパイプが敷かれ、夕陽の基盤が石狩にしっかりと根付くようになった」

この記事からも石狩支部の充実の様子がうかがえる。また、当時の寺下幸雄副支部長(昭30卒)が支部情報

を発行されたのもそのころであり、現在の支部情報誌「夕陽石狩」の先駆けとなった。その後、情宣部の活動として位置づけられ、年に四回の定期発行を続けている。「夕陽石狩」は、

会員間の連携を強めたり、会員の実践を掘り起こしたりする役割を果たすと共に、教頭昇任により他管内に転出された会員にも送られ、同窓の絆を強めることにも役立っている。

#### 現在そして発展期へ

石狩管内は、浜益村と厚田村が石狩市と合併し、江別市・千歳市・恵庭市・北広島市・石狩市・当別町・新篠津村の五市一町一村になった。現在夕陽会石狩支部には、百六十六名の現職会員と二十二名の退職会員が所属している。年代的には二十代が少ないのが悩みであるが、三、四十代が多く今後に大きな期待をもたせている。管理職は校長九名、教頭十四名となっている。また山田律子氏(昭41卒)が千歳市の教育委員長として活躍されているのも心強い。

先輩が苦勞し築き上げた夕陽会石狩支部である。私たち会員が改めて開学の教えである「土地墾闢・人民蕃殖」を受けとめ、「石狩教育」の一翼を担っていくという心意気をもって、日々の実践を進めていかなければならない。そのことが先輩の労に報いることや夕陽会石狩支部の発展につながると確信している。







## 法政研究室OB会

本間 淳一

(昭和46年卒 木古内町立鶴岡小学校長)

昭和四十二年四月に北海道教育大学函館分校に入学した我々は、それぞれ各研究室に配属になりました。

一部木造校舎が残っていた入学時ですが、ご多分にもれず我が法政研究室も歴史と伝統に輝く解体寸前の木造校舎の一室でした。

今思い出そうとしてもその研究室の暖房は石炭ストーブだったのか、まさか薪ストーブではなかったとは思いますがあまり詳しく思い出すことができません。

その後、新校舎の完成に伴い、新しい法政社経研究室にはいることになりました。

法政研究室は政治学の宇喜多 透教授 社経研究室は社会学の黒崎八洲次朗教授が指導教官でした。その後法律学の新里光代先生（現函館市教育委員会教育委員長）、経済学の荒木先生が着任されました。さて、わが法政研究室ですが毎年一月五日に研究室の懇親会を行っております。母体となっておりますのは宇喜多研究室のOBです。特別な会則もなく、法政研究室の卒業生はすべて会員と考えています。

ゆるやかな会則と強い連帯の絆、まさに法政研究室の面目躍如と自負するところであります。（自画自賛！）

一番お元氣な方は、私が初めて法政研究室のOB会に参加したときに、すでに道立西高等学校を退職され、世界中を旅行して、毎年OB会に参加するたにいろいろの国の旅行体験を楽しく報告しておられる昭和二十八年卒業の田口ミネ氏です。

かつて学芸大学の頃には、職業に就きながら通学することが可能だった制度があったということで、警察官として勤めながら大学を卒業した昭和三十年卒業の高階秀雄氏、同じく昭和三十年卒業の鈴木喜八郎氏、グアテマラの日本人学校教員として赴任することが決まり、盛大な送別会でグアテマラに送り出した昭和三十年卒業の渡辺康孝氏、昭和三十一年卒業の島田 誠氏、昔の国鉄出身で大学を卒業してそのまま国鉄職員として定年まで勤められた北見辰雄氏、今なお夕陽会などすべての会の参加率百パーセントを誇る半田 哲氏、三十三年卒業の中谷賢一郎氏、三十四年卒業の笠井敬一氏、菊池昌市氏、そして保険代理店を営まれておられる四十一年卒業の増田定雄氏など多士済々元氣いっぱい先輩がおります。新里教官が着任されてからの卒業生としては、渡島小中学校校長会の重責をになう北斗市立上磯小学校校長の安藤信男氏が

おります。さらに宇喜多教官の卒業生としてはサッカーと勉強を見事両立させた北海道教育大学附属養護学校高等部主事の小笠原章人氏がおります。

法政研究室OB会の紅二点昭和五十三年卒業の吉田和子先生、内田裕美子先生につきましてはいつも参加してください感謝いたします。

宇喜多先生の念頭の挨拶とその後の昨今の国内外の政治情勢の解説と分析、講義で始まるOB会は、宇喜多先生のすごい視点とわかりやすい解説に、参加者一同学生時代にもどつてというか、学生時代以上に真剣に聞いています。

両恩師先生のご退官後は年に一度、両先生を囲んでOB会は旧交を温めています。いつも元氣に参加しておられる会員も高齢化が進んで年々参加者が減ってきています。また若い会員の参加も少なくな心配しています。



宇喜多透先生退官記念祝賀会  
昭和62年3月21日 於：函館駅前五島軒

従来、学芸大学函館分校、教育大学函館分校は地元函館、渡島地区を中心とする入学者が多数を占めていましたが教育大学函館校と成つてからは特に道外からの入学者が多数を占めるようになりました。

母校の卒業生が全国津々浦々で活躍されることは大変すばらしいことですが、そのぶん卒業生が全国に散らばることになり、どうしても母校の研究室との連絡がとぎれがちになります。

また母校が教員養成課程を持たなくなるということを聞くにつけ、ますます法政研究室の先行きが心配になります。このことはどの研究室についても同様の事だと思います。

現在、法政研究室の事務局は函館市立深掘小学校の昭和六十三年卒業近江辰仁先生が担当しております。この研究室だよりをご覧になりました法政研究室出身の方は是非近況をご一報ください。お待ちしております。





# 社会に活躍する同窓



## 学級通信発、未来行

函館新聞社報道部 笠原 郁実  
(平成17年卒)

「なぜ、教育大を出て新聞記者になったの？」。取材先でこの一言をよく聞かれる。

◆ 小さな頃は、新聞を取り合うように読んでいた家族の中で一人、新聞はほとんど読まず、テレビニュースばかり。両親や兄弟はあきれた顔で「少しは新聞を読んで知識を深めなさい」と何度も言った。「なぜ？」と問うと「新聞は百科事典みたいに、あらゆる情報がぎゅつと詰まっているんだよ」との答え。しかし、今よりも更に文字の大きさが小さく、漢字が羅列する新聞を手にとろうとは思わなかった。

だが、小学校の教員だった両親が、夕食後、書きつづっていた学級通信は、文字の羅列であっても気になって仕方なかった。当時、父親はワープロで、母親は手書きで、学級内で起こったニュースや児童の作品などを細かく紹介。「週に何度多大変」と言いながらも、生き生きとした表情でレイアウトする姿に「私も発信してみたい」と羨望のまなざしで見つめていた。

そんな中、小学校六年生の時、大勢の人に文章を発信する機会を得た。それが「書記局便り」。本来、便りを書く担当で

はなかったが学習発表会のお知らせ、ボランティア活動などを書かせてもらい、今、考えれば、それが「原点」だったのかもしれない。

人前で話すのは苦手だったが、文字にして伝えるのは楽しい。読んだ人が「なるほど」と思うような文章を書きたいと、中学入学後も学年新聞を定期的に発行。高校では書く機会がなかったが、その頃から「新聞記者になりたい」と言っていた。つい先日、高校時代の友人に指摘された。

◆ 大学へは正直、「函館が好き」「教師にもなりたい」という理由での入学だった。環境問題に興味があったため、理科教育（地質学）を専攻。在学中は教員にも大きく心が動き、卒業後は「小学校の教員として働こうか」と考えた時期もあり、教員採用試験の勉強もしながら、新聞記者への思いを募らせる日々だった。

教育実習へは三度、道教育大附属函館小学校、上磯町立（現北斗市）茂辺地小学校、函館市立桐花中学校でそれぞれ学ばせていただいた。実習中は児童が本当に可愛く、悩みながらも授業をする楽しさの一端にも触れた。

なった茂辺地小学校では、理科教育の先輩、福島一哉先生に指導を受けた。一週間を過ぎたころ「学級通信を書いてみないか」と福島先生の一言。「気づいたこととか何でもいいよ」との後押しもあり、ペンを取ることに。児童の様子も織り交ぜながら、第三号までを発行した。「やはり、伝えることは楽しい」。子どもの可愛さに後ろ髪を引かれながら、その学級通信が、マスコミ職への「希望」から「志望」へと変わった。

就職するためには「まずは学ぶこと」そう思い、函館市内のTV放送局で映像スタッフとして三年半アルバイトした。媒体は違うものの、取材の仕方や取材対象者との距離感など多くを得た。学生の本分は勉強ということを理解しつつも、大学からアルバイトへ行き、その後、大学へ戻るといふ生活も送り、今、考えるに担当教官だった紀藤典夫助教授には申し訳ない気持ちでいっぱい。だが、辞めるはずもなく、結局卒業ギリギリまで迷惑をかけてしまう結果になってしまった。



◆ だが、そのアルバイト経験をPRし、現在の会社就職。はじめて自分一人取材し、書いた記事が新聞に掲載された喜びは忘れようがない。学級通信よりもさらに多くの人の目に触れ、発信したいことを書くことができる。学級通信が新

聞へとつながった。

現在、市内の幼稚園から大学まで、各校で取材活動に当たっている。毎週金曜日、本紙に掲載されている特集ページ「はこだて教育」も担当し、なるべく多くの教育活動を紹介しようと思っている。

地方紙の良いところは、たくさん「顔」を掲載できること、特色ある各校の取り組みを多く紹介できること。読む人の顔を思い浮かべながら「函館のことをもっと知って」という気持ちで記事に向かい合っている。

小さなころから触れていた学級通信は、現在、新聞という形に姿を変えた。決して、独りよがりな記事になってはいけないと心に誓いながらも、自分が楽しみながら書ける記事を目指し、筆を進める。現在（十一月十五日）、教育現場ははじめ、高校の必修科目の未履修問題、など多くの教育問題が表面化している。取材を通じ教育は、学校・教員・教育委員会だけが行っているわけではないことが伝わる。生活基盤となる家庭・地域・関係機関・社会全体すべてが手を繋いで、未来を担う子どもを育むことが大切。教育の最前線に立つ先輩・後輩にも頑張っていたたたいた私を、私を含む教職以外を選んだ卒業生も、手を繋ぐ役割を微力ながら手伝い続けたい。





## 大学の新たな機能 ～函館校の地域連携～

地域連携センター長 雁沢好博  
(函館校教授)

現在、全国の大学を取り巻く状況は大きく変化しています。少子化に伴う学生獲得競争、大学改組による魅力的で現代的課題に対応できる教育研究体制の整備、学長の強いリーダーシップによる大学運営の戦略的な運営などなど。北海道教育大学もこうした状況に対応した再編成を進めているところで、とりわけ、函館に新たに設置された「人間地域科学課程」は大学再編の中心眼目になっています。また、この改組は学内の再編で片付けられるものではなく、次のような重要な柱があると思われまます。それは、大学が地域とどのような協力・連携関係を結ぶのかという点です。これを最近、大学の教育研究に次ぐ、第三の柱とする考えが広く浸透してきています。元来、大学は社会における人材養成を行うことを最も重要な役割としてきました。しかし、それを学内に閉じるだけではなく、社会と強いつながりを持ちながら、人材養成も行い、複雑化多様化する社会と知的人的関係を築くことは当然の役割であったはずでです。しかし、大学にこうした情報を発信受信する機能が不十分であったことは否定できません。全国の各大学では、こうした取り組みを急速に押し進めています。

函館校では、今年度の改組に対応して学内の委員会体制を見直し、地域連携を図る部門として、三つの組織（地域連携センター、教育連携セ

ンター、広報室）を新たに整備し、これまでの様々な地域とのつながりを整理し、かつ、新たに開拓する試みを始めたところとです。ここでは地域連携センターの活動について、将来像を含めた現状について、ご報告いたします。地域連携センターの機能は図に示しましたように三つからなりたっています。それらは、①函館校の開放、②地方自治体・他大学との共同、③地域社会との連合です。①では大学の持つ教育力を広く市民に利用していたべく方策です。この中で、夕陽会のような様にご援助で維持している「教育資料館」の役割は重要と考えます。道内でも最も長い高等教育九十年の歴史の凝縮であり、これを一般道民に広く公開し、学生が本学で学ぶ誇りとなるような利用ができないものでしょうか？ 諸先輩のご意見やアイデアをぜひ、賜うことができれば幸いです。②は函館市と交流協定を締結しました。その後、たとえば市職員による市政に関する授業が行われるようになりました。また、市内にある八高等教育機関との連携も始まり、合同での大学紹介パンフレット、大学説明会、就職説明会、公開講座開設などを進めています。③はようやく始まったばかりですが、たとえば、小栗裕美助教による、高龍寺宝物点の解説展示（参加された同窓生の方も多いいのではないのでしょうか？）には千名近い参加者がありました。こうした大学の地域文化への貢献は、まさに

本学だけがなしうる大きな力だといえます。また、道立函館美術館では本学OBである金子鳴亭先生、生誕百周年企画展が開催されています。これにちなんで、本学でも「教育資料館」に保存されている先生の書を展示し、講演会を開催することを検討しています。

文化、教育発展に大きな寄与をしてきました。こうした総合的な連携活動が地域文化を発掘し、再評価し、新たな文化発展の礎を築くこととなるでしょう。本学が大学の第三機能を十分に発揮できるよう、夕陽会のような期待しております。

### 人間地域科学課程

#### NEW機能

●キーワード：地域との連携 研究 教育

#### 新たな機能の内容

##### A. 函館校独自の開放

- ・住民の生涯学習に答える
- ・公開講座の活性化
- ・「教育資料館」機能の活用（重要）
- ・市民に開放されたスペース

##### B. 地方自治体・大学との共同

- ・函館市交流協定（七飯町・北斗市）
- ・8大学連携
- ・アカデミックフォーラム
- ・教育委員会との連携
- ・共同教育（例：函館学）

##### C. 地域社会との連合

- ・街づくり
- ・イベントへの協賛（例：湯の川オンパク）
- ・企業研修への教員派遣
- ・地方企業家の教育参加

### 市民生涯教育センター

施設機能：8大学連携施設：地域連携拠点  
配置の特徴的な人事  
連携アドバイザー（重要）  
役割：連携事業の考案、運営、情報収集





## 絶えることなく夕陽の火を灯したい

帯広市支部長 森戸春樹  
(昭和45年卒 帯広市立南町中学校長)

本支部創成時の師範時代は帯広十勝から多くの青年が狩勝峠を越え「土地墾闢人民蕃殖」の精神を学びました。卒業後故郷に戻り、子弟の教育に邁進し、教育界はもちろん文化・政財界に多大な貢献を果たし北二師の名を轟かせました。

新学制で男女共学の学芸大学に生まれ変わった母校から「至る所に青山有り」と全道各地に赴任して行きました。

帯広十勝の山間僻地は函館渡島の比でない劣悪な生活環境で、上下水道なしは当たり前で荷馬車、馬糞の世界でした。理想と強い職業観に裏打ちされた青年

女性教師が現実の厳しさに耐えられず、道南に戻る例も珍しく有りませんでした。が、困難を克服し本市の教育を支え発展に尽くし今に連なります。

教育大函館分校及び函館校の現在は会員の減少と女性会員の占める割合が増す傾向が続いており、加えて母校が本年より新課程「人間地域科学課程」に大きく変革した現状を受け止めた支部運営や対応が求められています。

平成十八年度、帯広支部は現職員五十九名、OB会員四十二名で組織・活動しています。

現職会員の内訳は、昭和卒二十三名と平成卒三十六名です。男女数は三十一名対二十八名、小中と高校特殊他は四十八名対十一名です。

校長職二名、教頭職二名、高校二名、

青年・女性六名、学校代表、OB四名を中心に運営しております。平成十六年度からは新採用者を常任幹事として位置づけ同窓会の活動に参加しつつ同窓会の繋がりを意識できるように組織作りをしてきました。

四月二十九日に開催される総会は例年OB会員の矍鑠たる姿に触れる場と初任者との新しい関係、同窓生という縁を作る場です。また、十勝巴湾会との合同懇親会で十勝全体の夕陽会の絆を確かめ強める掛け替えのない事業で、盛会です。八月七日、OBによる七夕会は十勝OBと合同で行われ意気軒昂な時を過ごす恒例の事業です。帯広・十勝の両支部長も招かれ、支部運営や本部への意見具申など教えを受けています。

青年部会は壮年層を含め、数年前より巴湾会に声掛けをして合同で開催しています。この催しにも支部長が参加し会員の親睦・連携を図っています。

今後の大きな課題は、女性部会の活性化です。平成卒の女性が教育者として実績を重ねる研修の場を提供することも夕陽会帯広支部の責務です。

また、教育関係以外の同窓生が本支部に顔を出し、新たな同窓会の絆を作るための検討も急務です。

(絶えることなく同窓の灯を灯したい)



## 高等学校支部だより

高等学校支部長 大村義美  
(昭和44年卒 北海道大磯高等学校長)

高校支部は「夕陽会」の中では一番新しい支部ですが、卒業生の数は把握しているだけで百十余名を数え、北海道十四支庁ほぼ全域に在職中の教職員等と、退職して地域に貢献する先輩諸氏が含まれます。会員登録数は六十名余りですが、何とか会員拡大を図り支部としての力量形成をと日頃から念じております。

組織としては、七名の校長と六名の教頭・副校長、三名の道教委勤務者が中心になって支部活動を継続しております。私が支部長を拝命して二年めですが、学芸大学に入学し教育大学を卒業した団塊世代前年生まれの我々も、いよいよ来春定年退職を迎えることになりました。

以下、高校支部の一年を紹介します。

### 一、支部総会・懇親会

毎年一月に支部総会・懇親会を札幌で実施していますが、十七年度はこれに講演会を加え、去る一月十一日、ホテルサントリー札幌にて本部より川島会長、須藤幹事長、当支部の藤沢、中村両顧問をお迎えし、総勢二十四名で盛大に実施しました。総会に続き、弁護士・諏訪裕滋氏を講師に招き「教育現場で「デモクラシー」「主権」「人権」「自由」「平等」について正しく教えられているか」というタイトルで講演をいただきました。概要は「親の考え方が変わってきていること、デモクラシーが間違っって教えられたこと、

ナチュラローについて」などでしたが、教育者として考えなければいけない内容が数多く含まれていました。

続く懇親会は、懐かしい話や近況報告等で時間の経つのを忘れ、最後は寮歌を歌い別れを惜しみながら散会しました。

### 二、高等学校支部校長等懇親会

例年、校長会春季研究協議会の日程に併せて実施している「夕陽会高等学校支部校長等懇親会」をこの五月十日、札幌の焼肉「金剛山」において校長五名、教頭(事務局長)一名、OB二名に本庁の黒田参事を交えて盛大に実施しました。前段で十七年度の事業報告、決算報告があり、続いて十八年度事業計画案、予算案が提示されました。十九年度は支部長が定年退職となることから、事務局の交替と支部長人事についても話題になりました。更に会員の発掘・拡大について意見交換を行い、懇親会に移りました。

### 三、教育大学五分校出身校長懇親会

この会は事業計画に記されたものではありませんが「今や五分校が競う時代ではなく結束すべき」との趣旨から実施されてきたもので、例年北海道高等学校長協会普通部会全道大会時に実施しているものです。今年度は函館大会ということで、函館市松風町の某居酒屋に約四十名を集めて氣勢をあげました。末筆ながら高等学校支部の紹介を終わります。

支部だより

## 前納会費納入会員名簿追加分

田村 繁雄 札幌 昭25 上村 義彦 札幌 昭43  
田村 英子 札幌 昭25 園部 仁 札幌 昭19

島山 満 札幌 昭44  
中田 千年 札幌 昭43  
(平成十八年十二月十日現在)

## 夕陽会員計報

小野木珠一氏 昭15	18・3・9	八反田 稔氏 昭35	18・8・29
札幌市西区八軒4東2の5の7	キミ氏	函館市本通1の15の17	良子氏
桑高 利夫氏 昭35	18・5・6	鈴木 幸一氏 昭13	18・8・30
札幌市北区あいの里1の6の3の4の1402	玲子氏	函館市船見町2の18	徹氏
中川 壽夫氏 昭29	18・7・2	倉地 弘子氏 昭38	18・8・30
函館市東山2の52の4	祐子氏	札幌市東区北37条東29の7の1	基雄氏
鈴木 智氏 昭24	18・7・9	高平 正人氏 昭29	18・9・6
函館市谷地頭町33の11	郁子氏	室蘭市崎守町206の5	節子氏
加藤 彬氏 昭11	18・7・14	荒川 清氏 昭18	18・9・8
函館市本町22の23	静子氏	札幌市西区山の手3条5の2の10	18・9・8
大湯 隆利氏 昭30	18・7・17	山縣 巖氏 昭5	18・9・15
函館市美原2の51の17	久美子氏	札幌市中央区円山西町2の3の1	衛氏
永田 裕三氏 昭38	18・7・22	齊藤 尊司氏 昭19	18・9・22
函館市杉並町5の38	洋子氏	函館市美原2の12の5	文子氏
西埜 吉寛氏 昭50	18・8・3	井上富美男氏 昭20	18・9・27
日高町厚賀町139の2	亜季氏	札幌市南区藤野3の7の9の10	トミ子氏
桜庭 博寿氏 昭23	18・8・8	奥崎 敏雄氏 昭20	18・10・5
七飯町字本町492の32	淳子氏	札幌市西区二十四軒3の2の4の25の102	徳子氏
島崎 務氏 昭25	18・8・14	沖口 四郎氏 昭19	18・10・17
伊達市竹原町46の85	せつ氏	函館市日吉町4の24の10	ミサ氏
大場 充氏 昭23	18・8・26	高木 徹氏 昭36	18・10・22
七飯町字仁山45	せつ氏	函館市中道1の28の2	裕子氏
辻 憲司氏 昭22	18・8・26	諸留 安之氏 昭8	18・10・30
伊達市梅本町50の146	テイ氏	札幌市南区真駒内緑町2の14の2の805	則氏

橋本 公哉氏 昭32

函館市日吉町4の29の15

中島 禧行氏 昭36

函館市山の手3の49の7

有澤 文雄氏 昭18

帯広市西12条北1の22

北道 昌男氏 昭44

東京都板橋区高島平3の2の6

大橋 庸子氏 昭39

函館市昭和2の25の10

石黒 一次氏 昭49

函館市杉並町9の2

加藤喜三郎氏 昭13

京都府城陽市寺田大谷115の150

北村 朝光氏 昭12

札幌市西区発寒7条14の13の1

細間 富弘氏 昭28

函館市船見町2の18

山本 政雄氏 昭15

網走市つくしヶ丘5の10

内田 勉氏 昭32

函館市日吉町4の2の31

(平成十八年十二月十日現在)

◆会報一九〇号をお届けいたします。会員の皆様から玉稿や貴重な写真をお寄せいただきましたことに紙面をお借りし厚くお礼申し上げます。

◆今号の表紙は、五稜郭町の旧渡島支庁跡地に開館した函館中央図書館です。昨年十一月に函館公園より五稜郭公園側へ移転して以来、休日などは超満員の大盛況です。この一年間で入館者数は予想を大きく上回る八十万人を突破したそうです。正面入り口前には、同窓である小寺真知子氏(昭50卒)制作のブロンズ像「ハモニー」が設置されています。小寺氏の制作意図である平和への願いと人々との調和を大切にしている気持ちを、この函館・夕陽会を中心に大きく広げていきたいものと思います。

◆今年の北海道は、野球に関して大いに盛り上がりつつあった年でした。駒吉の夏の甲子園準優勝、日本ハムの日本一・アジア一に夢や希望をたくさんもらいました。感動を本当にありがとうございます。

◆次号依頼・次回「支部だより」は上川支部と苫小牧市支部、支部の歴史を振り返って「は十勝支部の予定です。準備をよろしく願っています。

(情宣部長 秋元 順一 記 昭49卒)

本部事務局へのご連絡などは、次の所へお願いいたします。

041 0806 函館市美原3丁目48番6号

北海道教育大学附属函館小学校内

夕陽会本部事務局

電話番号(0138) 46-2235

夕陽会専用(0138) 34-5520

FAX番号(0138) 47-7376

題字 文化勲章受章者 金子賢蔵(鷗亭)氏(昭4卒)

## 編集後記